

童話

# ニコくのお日あしな

榎 本 楠 郎

青い草の芽の出かゝつた芝生に、ほんのり春のうす日が照つてゐます。幼稚園のお庭では大勢の子供たちが、環になつたり、肩を組んだり、歌を唄つたり、ジャンケンをしたりして、面白さうに遊んでゐます。

さうかと思ふに、お猿さんのやうに ジャングル・シムス 登によぢ登つたり、滑臺の上突つ立つてシッケイをしたり、追つかげごっこをしてお教室の前を走つたり、ボン窓にミびついで、中をのぞいて喚わめいたりする子供もあ  
ります。

お教室の中では、風邪をひいた小さい女の子たちが六七人、みんなおさなく小さい机によりかゝつて、かあいゝ指先をクレヨンに染めながら、お人形や、羽子板や、おまゝごこの繪を、いつしんに描いてゐます。

側で、じつと見てゐる五六人の男の子たちは、急に自分たちも描きたくなつて、顔を見合はせました。  
するに、その中の一人の男の子が、

「ぼくたちも、なにか、かゝない。」

と云ひました。

みんな、「さんせい、さんせい！」と躍り上つて、よろこびました。

「いつたい、どこへ描くんさい？」

「さうだ、あの黒板がいゝや！ 廣くて大きいから——」

さう云ひながら、みんな正面にある黒板の前に走つて行つて、てんでに何か描かうございました。でも、まゝさう云ひながら、みんな正面にある黒板の前に走つて行つて、てんでに何か描かうございました。でも、まゝるく、よく肥えた博ちゃんだけ、急にもぢくして、つまらなさうに、チョークを握つたまゝ、かう云ひました。

「ぼく、いやだ、かゝないんだよう」。

博ちゃんが、何を描いたらいいのかわからず、ぐづぐづしてゐるうちに、もうみんなは、いろいろな色チョークで、元氣よく描きはじめました。

一ばん左の、脊の小さい男の子は、爪先を突つ立て、手を頭の上の方に伸して、赤いチョークで、グイグイ、大きな飛行機を描きました。その次の脊の高い子は、青と黄とで、軍艦のやうなお魚さかなを描きました。そのほか、自動車や、兵隊さんや、電車など描く子もありました。

みんな描きをはるゝ、後へよつて、ワイワイさわぎ出しました。

「だれのが、うまいか？」

「ぼくんさい」

「あれエ！ あの赤い飛行機が一等うまいぞ！ なアんだ、あれ、ぼくのか！」

「いや、ぼくのお魚だい！」

みんな、自慢し合ひました。

女の子たちも、笑つて見てゐます。

するさ、脊の一ばん高い正夫ちゃんが、ふき氣がついて、博ちゃんに云ひました。

「博ちゃん何を描いた？ 君のがないぞ。するいや。ねえ、君たち！」

「さうよ。博ちゃんのないや！」

「君、かけないのか？ なんだ、かいて来いよ——いくちなしだぞ！」

「さうだ。かゝなけア、いくちなしだ！」

博ちゃんは、ほんまに何も描かなかつたので、みんなに騒がれ出すさ、少しきまりが悪くなつて、泣き出しさうになりました。それに女の子たちも、みんな、博ちゃんの顔ばかり見つめてゐます。

正夫ちゃんは、博ちゃんが今にも泣き出しさうな顔をしだしたので、あわてゝ、かう云ひました。

「博ちゃんほうまいんだぞ、お帳面にかゝすさね。ねえ君、泣くなよ。ぼく、代りにかいてやるから。」

さう云ふが早い、正夫ちゃんは黒板の空いてる所へ行つて、赤いチョークで、グル／＼／＼／＼、洗面器ほごの大きな日の丸を描いて、そのまはりに針のやうな、たくさん線のつけました。大きなまつ赤な、お

日さまが出来ました。正夫ちゃんはそのそばへ、「ノガミヒロシ」を書きました。

「どうだい、うまいだらう？　これ、博ちゃんがかいたんだぞ。いゝだらう？　ね、博ちゃん！」

正夫ちゃんがさう云ふと、赤い飛行機を描いた小さい男の子がさび出して来て、白いチョークで、赤いお日さまに、笑つてゐる目や鼻や口を、す早く描き添へました。

「これでよしッ！　ニコニコお日さま、やあ、シッケイ！　こんにちはア！」

さう云つて、一ばん小さい男の子は、ほんごうにシッケイをして見せました。そこでみんなも、大きなまつ赤の顔のニコニコのお日さまを見上げて、ニコニコしながら、同じやうにシッケイをしました。

「君もしろよ。君の繪だぞ」。

小さい男の子は、博ちゃんにもシッケイをさせました。泣きべそをかいてゐた博ちゃんも、仕方なしにニコッリ笑つて、小さい手を、自分の耳のそばへ挙げました。

(をばり)